〈史料紹介〉

太田城水攻め研究の過去

―2023年新寄贈・太田孝旧蔵文書と太田孝氏の研究業績について―

海津　一朗

1. 太田孝旧蔵文書の公開にむけて

このほど当研究所に太田孝氏(2014年病没・享年90歳)のご遺族進也氏より同家の文書が寄贈された。名称は「太田孝旧蔵文書」であり、調書に寄れば以下の４点(冊子本)である。

① 大田村地籍図台帳(江戸期)　１冊
② 大田村地籍図台帳(明治期)　１冊
③ 太田村地籍図　１冊
④ 二等三等道路取調帳　太田村控　１冊

太田孝氏は、近隣の太田家と同様に中世土豪太田家の末裔を称する近世太田村の草分け旧家であり、太田区区長・太田城(史跡顕彰)保存会会長を歴任してきた。地元の少年剣道クラブの指導育成にことのほか情熱を注ぐ一面もあった(川端泰幸氏談)。今回、紀州研に寄贈された文書は、この過程で収集・保管されてきた区有文書控えであり、散逸を免れて伝来したものである。紀州研には、2009年度以後寄託されており、広く研究者・市民の閲覧活用に供されてきたが、太田家の代替わりを経て、この2023年に至り寄贈に切り替えられたわけである。この機会に寄託から寄贈に至る若干の経緯と、太田孝氏の業績について簡単に振り返っておきたい。

2.「城はわが村にあった！」―太田孝氏の太田城研究―

表１は、私たちの研究会が収集できた太田孝氏の著作と史料群である。そ

の大半は、太田孝氏からもらい請けたものであり、複写史料は晩年になって研究を託された時に移譲されたものである。現在では手に入りにくい戦前のデータや田中敬忠著書・写真などとともに、地籍図・測量図・古住宅地図の写本が含まれていた。図面類(No17・18・19)には、太田孝氏の研究にもとづく加筆が施されており、それをもとにしてNo１～９の著作が書かれている。著作は、初期は墨書き清書をゼロックスコピー(古いタイプ)したものだが、つぎにタイプの印刷、最後にワープロによる打ち直しに進化して普及性を高めている。これら著作は、太田孝氏の地元研究会が、自説を主張するために大量に頒布していたものとわかる。それはのちの私が、中和印刷と相談してラポの水攻め地図を1000部単位で印刷して太田城水攻め虚構説の打消しを図った姿と重なる。

私は表１諸稿を整理する今日まで、太田孝氏を地域を愛好する歴史少年あがりの学校教員と錯覚していた。著作ほぼすべてが2000年初頭以後のものであることを見逃していたのだ。これらの著書は、すべて太田城水攻め虚構説への戦いの著書だったのである。太田孝氏はもちろん地域史への造詣が深く史料の収集活動は若き日から行っていたはずだが、表１の著作活動に入る2000年は齢70歳半ばの段階だったのである。この点を見落として来た[1)]。

表１No７「草稿　紀ノ川歴史街道記と保存会の相違点」は、太田城水攻め虚構説を主唱した、額田雅裕氏が太田地域について分担署名した『紀の川―水の歴史街道―』(1996年)のうち太田村・水攻めに関する記述について、自説と対比しつつ逐一反論するというものである。この全438頁の大部の本は、建設省近畿地方建設局和歌山工事事務所が中野栄治代表の編集委員会に編纂させたもので、額田雅裕氏も委員会の委員である。非売品で普及はしていないが、公共施設に配布されたので研究者の間では知名度の高い普及書といえる。和歌山市立博物館学芸員である額田雅裕氏は、自館の紀要に見解を発表し、この本および特別展で自説の普及を図った。太田孝氏が額田説(太田城水攻め虚構説)を目にしたのはおそらくこの時点であり、そこから表１の史料蒐集と執筆活動が開始されたはずである。No７草稿は、2000年前後に額田説に反論するため地元自治会で協議してまとめたものに相違ない(あるいは県・市に提出した文書であろうか)。

表1　太田孝旧蔵文書・付録参考資料の内訳

NO	執筆者	タイトル	奥付け等	丁数	備考
	【太田孝氏著作】				
1	太田孝	太田城と太田の歴史探訪	2008年3月	31	活字タイプ付図
2	太田城保存会太田孝	太田城について	2001年	4	活字タイプ
3	太田城史跡顕彰保存会	太田城のあらまし		3	活字タイプ
4	太田孝	太田城について		24	写3冊
5	太田孝	太田村の変遷	2001年3月	30	写1冊異
6	太田孝	中世戦国期における紀州のようす 太田・根来・雑賀について	2000年10月	40	表紙活字　写2冊
7	太田城保存会太田孝	草稿　紀ノ川歴史街道記と保存会の相違点	（紀の川刊行1996年）	22	水田・額田説への地元からの反論書
8	太田孝	草稿　太田城水攻めに関する資料並に太田村の概要	2006年9月	25	
9	南・北太田自治会（記太田孝）	草稿　地域の様々な魅力の情報提供について	2001年6月	42	
	【収集史料】				
10	複写史料	太田家系		7	表紙朱コピー
11	複写史料	和歌山の偉人　小泉信吉　鎌田栄吉 太田左近		9	表紙朱コピー
12	鈴木真哉ほか	信長の雑賀攻め　秀吉の太田城水攻め	2001年12月	48	
13	田中敬忠著太田孝解読	太田城に関する古文書並びに遺跡資料	2001年10月	50	田中著書の写真を収録し翻刻案を
14	田中敬忠	太田城水攻史　コピー			3束分冊
15	宮村誌編纂委	宮村誌14名所旧跡　コピー	1930年ｓ5		ｐ141-168
16		宮村誌　田中敬忠水攻め他一式	（消印2006･9）	一袋	
	【調査史料】				
17	株式会社近代技研	出水堤防4級水準測量　平成11年度	2000年2月	9	
18	大田区	明治地籍図　注記有		9	
19	ゼンリン	水攻め地域旧住宅地図　朱入れ		9	

太田城水攻め虚構説という水田義一氏・額田雅裕氏２人の地理学者の「新説」は、大学教育学部（小中学校教育現場）・和歌山市教育委員会博物館を通じて広く喧伝されていた。額田雅裕氏の「実証」論文「太田城付近の地形環

境」(『和歌山市立博物館研究紀要』２、1987年)は、前述の建設省主催の著書『紀の川』(1996年)や、和歌山市立博物館の特別展「秀吉の日本三大水攻め」とその図録(1999年)により、本人が喧伝する[2] 驚くべき内容の分だけ話題を集めた。太田孝氏の執筆活動が開始されたのはまさにこの時点であった。虚構説が地元研究者の理解を非科学的な旧説・俗説と退けるなか、太田孝氏はひとり新説に抵抗し続けていたのである[3]。そして2005年に宮井一帯の荘園調査を行う私たち日本中世史研究者(海津・川端・野田阿紀子ら)との邂逅があるのだった。

3. 歴史捏造25年戦争　―紀州研の紀州惣国研究―

紀州研による太田城水攻めの検討作業が本格化するのは2007年の向陽高校現地シンポジウムからであり、以後の経緯は2017年の「太田城水攻め研究の現在」(本誌37号)に海津・宇民正・新谷和之・弓倉弘年が歴史学研究者の立場から総括した通りである[4]。私の主張は『中世終焉―秀吉の太田城水攻め』(清文堂、2008年)に尽きているのだが、巻末の文献目録には表１の太田孝論文１・４・５・６・８を明記していた。このような研究に影響されて、2020年に水攻め堤防西堤(B堤・土井堤)が発掘調査(上段部断ち割り・断面観察)されて、今年2023年に同堤が和歌山県の文化財(史跡)に指定された(写真1. 2)。虚構説が唱えられて以後、実に25年の長きにわたり放置されていたことになる。紀州研の関与は2007年以後の15年間である。

虚構説が唱えられた1990年代末から2007年まで、孤立無援のなかで10年の長きにわたり地域文化の真実を守り続けてきたのが表１の太田孝氏の研究であった[5]。私は「現在・未来」を語るのに急で、「太田城水攻め研究の過去」を飛ばしていた。先行研究・諸史料・地元伝承を重視し、地域文化を守らんとする執念が、今日の紀州惣国を確立したのであった。太田孝氏が所蔵文書の寄託・寄贈先を紀州研にしたこと(県や市ではなく)の意味の重さはもはや揚言するまでもなかろう。

＊

太田孝氏の歴史研究を分析してきたが(職業的な歴史研究者としての依頼仕事が増える中で)人間が歴史を書く時・意義についてこれほど考えさせられた

写真1　出水Ｂ堤防の発掘現場風景2020・3

写真2　和歌山市作成の
太田城パンフレット

ことはなかった。氏の執念が今日の史跡指定に繋がる（太田村水攻め事件についてはいまだ局部的な指定に止まるが、この後の行政の研究に期待したい）。むしろ、太田孝氏没後翌年から始まっている、南・北太田地区自治会の主催による太田城子ども祭り・郷土英雄マセンナ（摩仙阿尼）道行き行事の継続を喜びたい。本誌37号の「太田城水攻め研究の現在」結で触れた通り、「かくて中世惣国の根は残った」のである。

4.（付論）今回寄贈された史料より『二等三等道路取調帳　太田村控』

今回寄贈された史料は図面類が多いので、本学の地理学者たちの本格的な検討が望まれる。科研費の研究グループでも、研究協力の調査を一部行なった。そのうち、野田阿紀子氏が担当した表題の史料には、太田城・町を復元する際の基本情報が多いという報告をうけている。以下、野田氏の作表（表２）と調書を示しておきたい。

調書

「明治初期作成と見られる「二等三等道路取調帳　太田村控」においても、太田村内の道路ならびに川・用水路・樋・枠等の所在地名として「門堤」「西大堤」「南大堤」といったものが見られる（表２）。「西大堤」は不明だがおそらく小字絞田（現JR和歌山駅東口の南）付近にあったものと見られ、また「門堤」は玄通寺付近に、「南大堤」は通称八丁堤と呼ばれる日前宮正面の東西の

表2 「二等三等道路取調帳　太田村控」（紀州研蔵）川・用水の部　記載地名一覧表

【川・用水】

川名	所在地名	比定地（＊）
大門川	字　上川田～川田新田（大門土橋）	黒田　字東川田

川名	所在地名	比定地
治川	字　めのと～かたぶき	太田　字梅ノ戸

川名	所在地名	比定地
門田川	字　中ノ坪～道かしら	通称　ナカンツボ
（小溝）	字　片下り～片下り	
（小溝）	字　川田～川田	通称　シモカワタ／カミカワタ
（小溝）	字　土井～中ノ坪	太田　字土井～通称ナカンツボ
（小溝）	字　中ノ坪～南大堤	通称　ナカンツボ
（小溝）	字　直田～直田	
（小溝）	字　下川田～下川田	通称　シモカワタ
（小溝）	字　上川田～上川田	通称　カミカワタ
（小溝）	字　上川田～神畔ノ森	通称　カミカワタ～神畔の森（カンクロ）
（小溝）	字　南大堤～南大堤	通称　八丁堤
（小溝）	字　ちまた～ちまた	
（小溝）	字　川田～川田	通称　シモカワタ／カミカワタ
（小溝）	字　川田～川田	通称　シモカワタ／カミカワタ
（小溝）	字　竹内～竹内	
（小溝）	字　ちまた～高橋	通称　高橋（『紀州今昔』に写真あり）
（小溝）	字　高橋～宮ノ西	通称　高橋～日前宮の西側
（小溝）	字　宮ノ西～宮ノ西	日前宮の西側ヵ

川名	所在地名	比定地
掛屋川	字　東ノ口～池ノ首	
（小溝）	字　池ノ首～樋ノ口	黒田　字池ノ首
（小溝）	字　びわ田～びわ田	太田　字琵琶田

川名	所在地名	比定地
高木川小溝	字　高木～高木	
（小溝）	字　蓮池～蓮池	
（小溝）	字　蓮池端～絞田	
（小溝）	字　絞田～絞田	太田　字絞り田

【樋・渡井・枠等】

記載地名	比定地
越前	
角田	黒田　門田
大目	
大田	
硲垣内	秋月　字硲に関係するヵ
門堤	玄通寺辺りヵ
道場前（玄通寺）	玄通寺辺りヵ
門堤（玄通寺）	玄通寺辺りヵ
池ノ首	黒田　小字池ノ首
東ノ口	
西ノ口	
垣内	
門堤前田	
墓ノ下	
弓天神後	弓天神辺りヵ
茶屋ノ辻	
弓天神前三ッ樋	弓天神辺りヵ
ミとせ	太田　小字美戸瀬
五反長	
高木	
藤ヶ森	藤ヶ森塚辺りヵ
絞田	太田　小字絞り田
西大堤	
里樋	
竹の内	
弓天神前	弓天神辺りヵ
西ノ口	
上川田	通称　カミカワタ
土井甚原	太田　小字土井
下川田	通称　シモカワタ
下川田文六樋	通称　シモカワタ
川田	通称　カミカワタ／シモカワタ
ちまた	
西地蔵前	太田　美戸瀬の地蔵堂
南大堤	通称　八丁堤
直田	
次大夫樋	
中ノ坪	通称　ナカンツボ
南大堤中トウロ	通称八丁堤の「中の灯籠」
馬乗免	太田　小字馬乗免
南大堤大浴	通称　八丁堤
惣光寺前大浴	惣光寺
小下戸	太田　小字下戸

川名	所在地名	比定地
(小溝)	字　藤ヶ森～森ノ下	藤ヶ森塚辺りヵ
(小溝)	字　絞田～西天神垣内	太田　字絞り田
(小溝)	字　門天神前～門天神前	太田　奥天神辺りヵ
(小溝)	字　茶屋ノ辻西ノ口～茶屋ノ辻西ノ口	
(小溝)	字　はかの下～はかの下	
(小溝)	字　西垣内～西垣内	
(小溝)	字　垣内～垣内	
(小溝)	字　垣内～奥村十蔵屋敷東角	

川名	所在地名	比定地
四ヶ川(小溝)	字　角田～角田	黒田　字門田
(小溝)	字　角田～門堤	黒田　字門田～玄通寺辺りヵ
(小溝)	字　札場～新田	

川名	所在地名	比定地
下川田小溝	字　下川田～下川田	通称　シモカワタ
(小溝)	字　下川田	通称　シモカワタ
(小溝)	字　下川田～石原	通称　シモカワタ

川名	所在地名	比定地
上川田小溝	字　上川田荒ノくひ～上川田荒ノくひ	通称　カミカワタ

川名	所在地名	比定地
四ヶ川小溝	字　名草橋～名草橋	

＊比定地欄：通称○○は、太田地区内の通称地名

記載地名	比定地
大下戸	太田　小字下戸
片下り	
通町口	
南沿	
馬乗免長沿	太田　小字馬乗免
めのと	太田　小字梅ノ戸
高田	
秋月村分	
神前村領	

＊記載地名欄：重複するものは除く

県道とそれぞれ比定される。いずれも近世に描かれた太田城水攻めを伝える絵図等の堤防位置と合致していることから、水攻め堤防の遺跡と考えられるものである(野田阿紀子)。」

この野田氏の文章は、本来和歌山井堰研究会編『紀ノ川流域堤防井堰等調査報告書３集和歌山平野』の「考察中世の文献史料を読む」として執筆されたものの一部である。同書編集部が、宇民正氏の太田城横堤「開いた輪中堤防説」を無視したため、原稿を取り下げてもらった経緯がある(この件については同書のあとがきに額田雅裕・北野隆亮両氏の立場からの説明がある)。

註記

1) 太田孝氏の著書は、郷土史研究者の多くがそうであるように、自己の成果を淡淡と示して他説に関説しない。従って、著作だけでは私が取材で得た強烈な怒りが見えづらい。だがこのNo７によって、双方の学術的な対立点がわかり、かつ地元の研究に対する基本姿勢を看取ることができるのである。今回翻刻しようかと思ったが、20枚余の短い書面であり、歴史研究の原点といえる筆致であるためあえて後学各自に実物にあたっていただきたい。

2) 額田氏は日本史雑誌の博物館特集のアンケート「研究上影響をうけた展覧会３つ」で自身のこの企画展を挙げていた(『日本歴史』680号2005年新年号特集：博物館と日本史「私のえらぶ図録・展示」アンケート)。

3) 太田孝氏の太田城保存会は出水堤防の測量を業者委託した。和歌山県・和歌山市が水攻め堤防の史跡調査をしないため、業を煮やして地域自らの私費で調査に踏み切った(表１No17)。これが2000年２月のことである。私たち和歌山井堰研究会が全く同様の考えから業者委託したのは2003年８月のことだった(成果は和歌山井堰研究会『紀ノ川流域堤防井堰等遺跡調査報告書Ⅱ那賀郡編』2004)。

4) この註に覚書として紀州研の研究履歴を掲げておきたい。紀州研では、上村雅洋所長時代の2007年７月１日に向陽高校記念館にてシンポジウム「太田城水攻めと出水堤防」を実施した。和歌山県教育委員会等の後援、和歌山大学の支援(小田章学長：当時)を得て、同システム工学部の松田憲幸研究室による場外中継も行われて広く学界の注目を集めた。これは清文堂から『和歌山大学フィールドミュージアム叢書①』(2008年５月)として刊行され、さらに映像教材の「和歌山大学フィールドミュージアムライブラリー①」(2009年)も作られて、紀州研の研究活動にとって大きな画期をなした。本誌に掲載された太田城水攻め関係の論文は以下の通りであり、29号(2008年)には小特集〈『紀州研フィールドミュージアム叢書①　中世終焉』の波紋〉が組まれるなど、2007～10年に集中的に取り組まれた基幹的研究であったことがわかる。

・宇民　正・宮田順吉「「太田城水攻め」の土木技術面から見直し」27号、2006年
・軽部大蔵「水攻め堤防の安定性の検討」28号、2007年
・海津一朗「〈シンポジウム報告〉太田城水攻めと出水堤防―フィールドミュージアム雑賀惣国―」28号、2007年

写真3　向陽高校シンポ会場満員の聴衆
左翼の最前列に太田孝氏と大田区自治会
秋月会長の姿が見られる

写真4　出水Ａ堤防にて
宇民・軽部両教授

・西岡虎之助「太田城水攻めについて」(解題　海津一朗・江利川春雄)29号、2008年
・北野隆亮「太田城の考古学史と景観復元」29号、2008年(依頼原稿)
・寺西貞弘「太田城水攻めの政治的意義」29号、2008年(依頼原稿)
・海津一朗「〈2010年度特別展報告〉西岡虎之助　民衆史学の出発」32号、2011年
・宇民　正・海津一朗・新谷和之・弓倉弘年「太田城水攻め研究の現在―『中世終焉―秀吉の太田城水攻め―』刊行８年の総括」37号、2016年

なお、上記の宇民ほかの論文(本誌37号)には以下の章が含まれている。

・宇民　正「太田城問題の補充検討について」
・海津一朗「国家史・民衆史」「考古学分野の太田城」
・新谷和之「城郭史の太田城」
・弓倉弘年「『中世終焉』以降の豊臣政権研究と紀伊」

また、本誌掲載の論文をうけて作られた紀州研アイテムは以下である。

＊海津一朗編『フィールドミュージアム雑賀の惣国・太田城編　秀吉の太田城水攻めにより〈失われた宗教共和国〉を求めて』2007年(５刷9000部)
＊和歌山大学フィールドミュージアム叢書①　海津一朗編『中世終焉　秀吉の太田城水攻めを考える』清文堂、2008年
＊和歌山大学フィールドミュージアムライブラリー①　海津一朗編『秀吉の太田城水攻め　中世の自治から近世の平和へ』2009年

5)　荘園制の研究者の私が和大に赴任したのが1997年であり、直後の笠田荘保存運動～国庫補助荘園遺跡調査６か年計画に忙殺され、太田城や惣国の研究状況は気になりつつ

も放置せざるをえなかった(虚構説の地理学者たちとともに荘園調査に取り組まねばならぬ事情もあった)。宇民正氏・軽部大蔵氏の加勢を得て、紀州研として太田城問題に取り組んだのが2007年のこと。それまで10年余、水田・額田両氏に対峙し続けたのは太田孝氏はじめ太田城保存会の面々の執念だった。

太田孝氏病没の翌年の太田城慰霊祭において自治会の作成した摩仙名（太田城郷土英雄）グッズ
左：パレード軍旗　右：クリアファイル　以後数VERあり

〈追記〉

なお、脱稿後に若き日の太田孝氏の風貌―文武両道―について、太田出身の中世史研究者川端泰幸氏(大谷大学文学部)より証言を得た。地元の剣道クラブを率いる太田氏の「指導」には川端氏も耐えられず逃亡したという(海津ゼミの科研研究：太田城関係文献の枢要は川端研究室に移管している)。